
そのオトコ要注意っ (社内コンテスト編)

和 貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そのオトコ要注意っ (社内コンテスト編)

【Nコード】

N51920

【作者名】

和貴

【あらすじ】

一年で最も忙しい決算時期、連日の仕事に追い立てられて疲れた私を見兼ねたのか、司は私を食事に誘った。なのに約束の時間が過ぎて司の姿は見えなくて…… ヒロイン恵理の女性視点。そのオトコ シリーズ第2弾…… (本当はこちらが第1弾の投稿でした)
2011/02/14完結!

第1話

> i 1 3 2 0 9 | 3 1 6 <

「課長、ゴメン。まだそっちに行けそうにない」

「そんな……」

携帯から、少しだけ申し訳なさそうな司の声が聞こえた。思いもよらない彼からの返答に、私は軽く息を飲む。

「仕事、ゼンゼン片付かないんだ。あのさ、今度……」

「もおいいわよっ!」

P i

言い掛けた言葉を遮って、私は一方的に司からの通話を切ってしまった。

なによ……『晩ご飯、久し振りに外でどう?』だなんて司の方から誘って来たクセに……私は自分の仕事を無理矢理途中で切り上げて、ずっとここで待っていたのに。

こんなのって……

胸に何かがこみ上げて、眼のまわりが熱くなった。思わず手にしていた携帯を、私は大きく頭上に振り上げる

待ち合わせ場所だった全日空ホテルの泉の前で……ピンクの携帯を握って腕を大きく振り上げている、純白のショートコート姿の私を眼にした通りすがりの人達は、みんな一様に不思議そうな視線を投げ掛けて擦れ違っただけ……

「……………」

私はきまりが悪くなって、大きなため息と一緒に、振り上げていた腕を力無く下ろした。

* * *

会社は重要な年度末である三月に入り、社内全体が多忙を極めていた。加えて人事異動が発表されて間も無く……自分の部署の業務どころか、社長である父の業務補佐も兼ねた事務処理に追われてしまった私は、普段よりも『沸点』がかなり低くなっていたみたいだった。

自分でも苛々しているのは判っている。勿論私の体調サイクルの『お月さま』も関係あるのかもだけど、本当は自分の業務と体調だけが『沸点』の低い理由じゃない。そんなのは毎年の事だもの。

男日照りの『干物女』と陰口を言われるくらい仕事一筋だったこの私が、今までと大きく違ってしまったのは、司が傍に居るからだ。

司は去年、私の部署に配属された新卒社員だった。入社式に寝坊

して、遅れた分を取り返そうとしたのか、それとも走り屋の『血』が騒いでしまったのかは判らないけれど、遅出だった私の出勤途中に後方から思いつ切り煽りを入れてくれて、オマケに私のすぐ後ろで勝手に事故を遣らかして、勝手に病院送りになってくれたお騒がせ男。

だけど、まさかそのお騒がせ男が私の部署に配属予定が組まれていたなんて……正直考えたくも無かつたし、関わりにはなりたくないわと本気で思ってしまったもの。

そんなお騒がせ男を部署に遣した人事課を、当時私は相当恨んでしまった。だって、聞けば司は入院して間も無く、長期家賃滞納で大家さんから見放され、一方的に賃貸契約を解除されていた事が発覚したと言うのだ。事前に耳にしていた悪い噂も、まさかと思いつ気になって素行を調べてみれば、やっぱりの走り屋で、金銭処かオンナにだってだらしない……とんでもない不良男だったんだもの。

でも次の人事が決まるまでの期間は私の『部下』なワケなのだし、問題大アリの司だけれど、私は嫌々仕方無く……それでも少しだけ心のどこかで浮かれている自分を自重しながら、司を『居候くん』にしてあげたのだ。

この一年で司は随分と成長して、『他人』だった同居人は私の中では『カレシ』的な位置関係になっていた……と、自分ではそう思う。だけど、同じ一っ屋根に住んで居ると言うのに、最近はお互いの業務に追われてずっと擦れ違いの生活だった。

遅くまで会社に残っている私を司は心配してくれるけれど、司だって夜中の一時頃まで外出していて、顔を合わせる事が出来るのは

朝食の時くらい。最近の連絡は、専らメールでの遣り取りしか無かった。

だから、司から誘ってくれた時、私はとても嬉しかった。業務に追われて落ち込んでいた私の気持ちが、せつかく上向きになり掛かっていたのに……

第2話

> i 1 3 2 1 0 — 3 1 6 <

翌日の午後、私は息抜きの心算で、滅多に足を運ばない部内フロアのお茶室に向った。後から続いて司が入って来たのには驚いてしまったけれど、これってもしかしたら司がストーカーしていたのかも？

「珍しいっスね？ 課長とココで会うのって、初めてじゃないっスか？」

司はそう言っただけで笑ったけれど、なんとなく『ソレ』っぽい？ 今浮べている笑顔だってわざとらしく思えて、私はツンとソッポを向いた。

昨日の事、私はまだ許してなんか……いないんだからねっ？

なのに司は、いつも通りの相変わらずな態度を取っている。少しは『悪かったなあ』とか、『反省したんだよ』って思わせるような態度くらい取れないの？

そう思ったのだけれど、よくよく考えたら凹んでいる司なんてガラじゃなければ、私だって見たく……ないかも？

まあいいか。普段の調子で話し掛けられちゃうと、そう無碍には出来ないし、私だって司の『上司』なのだから。

で、気を取り直して、私は司に向き直った。

「この後六時からQCね？ 昨日指摘したパワーポイントの内容を、もう少し詳しく検討しますから」

QCとは、品質管理活動の事で、製造現場の従業員が自発的に職場の管理や改善を検討して、改善に繋いで行く社内小集団活動の事。現在では、全社的な視野に欠けると言う欠陥が指摘されて、以前よりはあまり持て囃されなくなったけれど、木村工業では今でも健在。通常業務とは別のもので、会社の新年度に部内で四、五人のグループメンバーを構成して、業務関連の改善を目標に一年間活動し、年度末頃に結果を報告する場が設けられている。勿論、単なる報告会では終わらず、内容を審査・評価されて、上位表彰チームには会社からそれなりの褒章が与えられるから、発表会は例年白熱化している。

本当は、昨日待ち合わせ場所に来なかった理由が聞きたかったのだけれど、私は敢えて仕事の話を持ち出した。いつまでも拗ねている上司だと思われたくないし、その事を問い質して、逆に司から私の弱味を掴まれてしまいそうな気がして、なんとなく厭だったから。

一瞬、司は怯んだ素振りを見せると、面倒臭そうに左の利き手で首筋を掻きながら、私から視線を逸らせた。

やっぱり……昨日の事を私が言い出すかと思って、身構えていたのね？ そうはいかないわよ？

「キビシイよな？ あれでいいじゃん？」

「良くないわ。二次選考は今回の比じゃないのよ?」

私の事務的なお約束の口調に、司は困った顔をして苦笑した。

本当は、私だって自分の業務が忙しくて、時間的な余裕なんか無い。今回の一次選考合格さえ無かったら、少しはその浮いた時間を自分の業務に充てる事が出来るのに……そう思う反面、私は元不良だったこの司が、車の運転と女の子以外で、仕事に関して興味を持ち、熱意を持って真剣に取り組んでいる姿を初めて目の当りにしてしまい、実の処驚かされていたんだもの。

そして司の上司としての立場と……そ、そのっ……『自分的には一応カノジヨ』としての立場から、『司』と言う人材がこの会社でどこまで通用するものなのか、興味本位に知りたくなくなってしまったの。

この『自分的には一応カノジヨ』……全く以って情無いのだけれど、司と私の出逢いは、司が新卒社員として私の部署に遣って来た一年前に遡る。自称『元走り屋』の司は、未だに私の事を『カノジヨ』だって認めてくれてはいないみたい。

『俺が、いつ課長のコトをカノジヨだって言いましたっけ?』

会社を出たら名前と呼んで欲しいのに、私が何度頼んでも、司は私の事を『課長』としか呼んでくれない。それどころか、いつも司はこの言葉を口にする。

私はその言葉を聞く度に、魔法でも掛けられたみたいに言い返せ

なくなってしまう、結局口を噤んでしまう。まるで私を黙らせる為の、司のダメ出しキメ言葉。

どうしてそんなに意地悪なのよ？

第3話

> i 1 3 2 1 3 — 3 1 6 <

現在QCの一次審査では、司のチームが本社スタッフ職別十五チームの中で、予選二位に選ばれていた。

内容は全国のメンテナンス社員が携帯している工具等の分類区分と系列のコード化。自社開発ボイラと医療関連機器の販売を世界規模で展開している木村工業株式会社は、クライアントの販売管理情報は既にオンライン化されてはいたものの、会社内部に対する部品管理体制は、創業以来三十年近くも紙媒体の手作業で、かなりの遅れを取っていた。

以前は部品課担当主任が手作業で台帳管理をしていた何千点もの工具・備品類を、今回司達のグループが取り組んだ事により、大分類、中分類、小分類と言う三段階に設定された後、紙媒体から電子^{データベース}DB管理に切り替えられて、オンラインでの検索が可能になった。

管理の移行は、文字通りその膨大な情報量を整理する事。部内で通常業務をこなしている社員だけではとてもではないけれど時間的に余裕が無く、加えて発表間近だったボイラの試作品に重大な不具合が発生してしまい、クレーム・メンテナンス対応部門である私の第三設計課は、QCまで手が廻らない状態に追い込まれ、改善提案の雛形を上げておきながら放置されていた状態だった。

そこで入社時に大怪我をしましてしまい、社員研修を未だに完了していなかった司に白羽の矢が当たったのだ。

研修の未履修　それは即ち即戦力になれない『使えない社員』。正社員であるにも関わらず、十分に業務をこなせられない不名誉な事を告げられたのも同然なのに、司は嫌がりもせず、他に社員が丸投げしてしまったテーマを引き継いでくれた。

司は『どうせヒマだし、俺でよければ』と快諾したけれど、私の眼には司の目論見が手に取るように判っていた。事務員や派遣の女の子達に全面協力を願い、資料収集やデータ作成を頼む事になっていたので。

六人のメンバー構成でリーダーは男性の司だけ。後は事務の女子社員三名と、派遣の女の子二名。『女つたらし』の司が、この状況を厭だと拒絶する事は皆無で……QCの時間には決まってお茶とお菓子が用意されていて、まるで休憩時間のような感じ。時折冗談や雑談を交えて必要以上に親密に、尚且つ愉しそうにしている司の姿を眼にする度に、私の苛々は増すばかり。

自分から引き受けたのも、そういう魂胆なら納得出来るわ。なんだかんだ言っても、結局彼女達と仲良くなりたかったのよね？

そう思うと、私はちょっぴり悲しくなってしまう。

* * *

「もう少し、パワーポイントでの視覚から伝える内容にしないと。せっかくの発表内容が台無しです」

私は司に淹れて貰ったブラックコーヒーが入った紙コップを受け

取って、事務的にそう言った。

一次選考で見たパワーポイントの出来は、正直褒められたものではなかった。発表原稿はそれなりのものが完成されていたからこそ的一位獲得。でも視覚で訴えるパワーポイントがいまひとつ要領を得ていないし、ぱつと見でも誤字・脱字が多く、全体の画像統一感だって少しも窺え無かったのも気になっていた。

「って、二人つきりなのに、今でもその業務口調なんだな。何とかなんない？」

「あん！」

司は私を軽く睨み、怒ったフリをして近付くと、長身の身体を浅く屈めて私のおでこにコッソソとおでこをくっ付けて来た。

第3話（後書き）

パワーポイント：研究発表等で使用されるプレゼンテーションソフト。プロジェクターと言う機械を使って映画のようにスクリーンに映す事が出来ます。文字やグラフ等を自由に表示するのはもちろん、アニメーションを張り付けたり、部分的な強調を動画として作成可能な、スライド画像です。略してパワポ。

第4話

> i 1 3 2 1 4 — 3 1 6 <

「無理よ……ち、ちよつと？」

社内で私と司が付き合っているのは絶対に秘密。誰も居ないだろうと油断していると、いつ他の人に交際がばれてしまつかも知れないし、妙な噂を立てられてしまえばお互いに身動きが取れなくなつて困るだけ。だから余所々しくなるのはある程度当然の事だし、これは二人の暗黙の了解……だったのに……

司は私がカップを受け取ったのを確認したとたん、いきなり身体を押し付けるようにして寄って来た。そしてその勢いで、そのまま私に迫って来る。

二畳ほどの狭いお茶室で、カップに並々と注がれたコーヒーを溢してはと集中してしまい、司への警戒心を欠いてしまった私は、アツと言う間に壁際に追い遣られてしまった。

「ち、ちよつ、なにす……んっ」

司の口が、私の声を飲み込んだ。

強めに唇を押し付けて私の唇を割り拡げると、熱い舌を差し込んで来る。

私は一気に魂を抜き取られてしまったようになり、すううつと意識が薄れて、司の舌に翻弄された。

「あ……ん……」

気持ちいい……そう思った途端、司はいきなりキスを止めて、私の上気した顔を面白そうに覗き込むと、そつと耳元で囁いた。

「感じてる課長って、カワイー」

「なっ……っ?」

クスクスと声を押し殺して笑う司。

からかわれてしまったのだと思った私は、ムツとなって司をジロリと睨み上げた。

それでも司は、私がこんなに不機嫌になっている理由まで既に判っていたみたい。怯みさえしないんだもの。

「昨日の事、まだ怒ってんだ」

「あ、当たり前でしょう?」

強気で言い返したけれど、ドキドキが止まらない。顔が熱くなっているのは、きっと赤面してしまった証拠だわ。そうだと判っているのに、司のニヤニヤ顔が許せなくて、私は司から視線を外そうとはしなかった。

……だって……

昨日のお詫びがこの『キス』でごまかされそうな雰囲気だったか

「だって、課長が悪いんだし」

「それ、どついう意味？」

まだ言つ気？

聞き捨てならないセリフに、私は少々苛ついた。

「今日もQCを見るって言つけど、昨日だって相当パワーポにケチ付けてきたでしょ？」

「それが何か？」

平然として答えると、司は顔を顰めて左手で自分の頭をクシヤクシヤと掻き回し『あーっつ！ 判ンねえーのかよ？』と投げやりに呟く。

「昨日は誰かさんの指示で、パワーポの修正していたの」

「え？ ……それであんなに遅くまで？」

「そ」

「……」

私は、昨日のQC発表練習の事を思い出した。

第5話

> i 1 3 2 1 2 | 3 1 6 <

『……と思われ、迅速な情報整理と電子DBデータ・ベースの公開が……』

『そこ、スライド停めて。二つ目の『目的』の所に戻って?』

一通り流して貰った後の二度目の練習で、私はパワーポイントのスライド操作をしていた派遣の徳永さんの手を止める。

『このスライドから、皆さんがそれぞれ一生懸命に取り組んだと言う事が窺えます。ですが正直、このパワーポイントは、全体的に漠然とした出来です。発表原稿のキーワードを大きく提示して、視聴者側に判り易くなるよう工夫した方がより効果的です。この場面では何を訴えたいのか、どう言った表現が望ましいのか……眼で認識出来るように。文章だと文字が細かくなってしまう。その上の画面では、切り替わるまでに全文を読み切れません。眼で追わせる表示方よりも、画像が直接頭に入って来る様、視覚に直接訴えるスライド……例えばこの場合なら……』

私からのアドバイスが終ると、誰からも無く溜息が漏れた。

『初めからそう言ってくれれば……これでもう完成したものだと思っていたのに……』

司が愚痴った。

確かに、この時点からスライドを見直して修正を掛けると言う作

業は、殆んど白紙状態に戻してやり直すべきだと言われているようなものだと思った。

一次選考の場での発表は、この内容でも十分だと思ったけれど、二次選考が決まってしまった以上、今となってはこのスライド内容で第三設計課の代表として出場させる訳にはいかなかった。二次は全国からの選抜組みなのだ。発表原稿は別としても、パワーポイントの完成度だけで比較すれば、司達が恥を掻くのは眼に見えている。

だからこそもっといいものを……と、私はつい熱弁を揮ってしまった。

部内フロアの壁掛け時計は既に退社時間を一時間以上も過ぎていく。何より、社員の人手が不足しているからとは言え、派遣の女子を二人とも巻き込んだの残業だった。

その後、私は自分の権限で彼女達を退社させ、なんとか協力して貰えそうな社員数人に声を掛けて、他部署での別の打ち合わせ会議に行ってしまう、そのまま部署には戻らずに、司とのプライベートの待ち合わせ場所に急いだのだった。

第6話

> i 1 3 2 1 5 | 3 1 6 <

私の問い掛けに、司は少しだけ機嫌を損ねて頷いた。

「なに？ 待ち合わせに行けなかったのは、私のせいだって言いたいの？」

「べ……別にそこまでは言っていないけどさ……」

司は口を尖らせて否定したけれど……だけど、やっぱり『そう』
……なのね？

* * *

「……以上で『ガテン系KIIT TOOLお助け隊』の発表を終わります。ご清聴、ありがとうございました」

お茶室での後、その日の夕方の合わせ発表で、チームリーダーの司が終了の口上を述べた。

私は昨日とは比較にならないくらい完成度の高いパワーポイントに、感動さえ覚えてしまった。途中、何度もストップを掛けた私の指摘を聞き流さずに、司はあれから居残り、殆んど一人でパワーポ

イントの変更修正を遣っていたのだそうだ。

これだけのものを作成し直したのだから、時間が掛かって当たり前だわ。だから昨日の朝、入社時の車内で司が誘ってくれた『外食』に、誘った司が間に合わなかったのね……

ドタキャンされたのは悔しくて本当に許せなかったけれど……でも、司がこれほどまでに私のオーダーに対して、忠実に応えてくれるとは思ってもみなかった。

「見直し……」

「うわぁー、日高さん凄いですうー!」

『見直したわ……』私が言い掛けた言葉を遮るように、派遣さん二人が興奮気味に司を褒めて取囲む。

司は、一瞬だけチラリと私に視線を遣したけれど、すぐに女の子達の方を向いてしまった。

「そう? じゃ、打ち上げなんて出来そうかなぁー」

「モチじゃないですかぁー!」

「これだけ遣ったんですから、落ちても打ち上げはしましょうよー」

「なにそれ、落選決定ですかぁ?」

司はニコニコしながら余裕で突っ込みを入れた。

言葉では謙遜しているけれど、態度は堂々として自信に満ち溢れている司を、私は少しだけ見直して……そして今まで以上に司が頼もしく思えた。

景気の良い会話を持ち出す彼女達の明るい声に、いつの間にか司のチームの周りを、部内全員はもとより、通り掛かった他部署の社員までが取囲んでいた。

……なんだろう？ この胸のモヤモヤは？

司の出来栄えを手放して褒めてあげたいのに、何故だか言葉が胸に悶えて言い出せない。上司として、何か言葉をも思っただけけれど、気の利いた言葉どころか、マニュアル通りの褒め言葉ですら、今の私には思い浮かばなかった。

第7話

> i 1 3 2 1 7 — 3 1 6 <

「どうします？ やっぱ病院に行った方が良くないですか？」

「いいから、さっさと行きなさいよ」

自室のベッドで、私はガバツと布団を頭から被った。

QCの最終審査が行われた翌日の土曜日。休日だった事もあり、張り詰めていた緊張の糸が切れたのか、私は強い眩暈を感じて自宅で倒れてしまった。

情無い自分に嫌気がさした私は、司の優しい気遣いを煙たがり、普段以上に『厭な女』になっていた。

最終選考の結果……信じられないって言ったら司に失礼なのかしら？ そう。まさかとは思ったけれど、本当に司のチームは全国の頂点に上り詰めてしまった。司のチームは社内内部に向けての情報処理とその開示が高く評価されての表彰だった。

毎年開催されているQCの発表会だけれど、初めての全国一位表彰に部署は大いに盛り上がって活気付き、社員ひとりひとりのヤル気パワーが業務面での良い効果として反映されていた。

一人、私を残しては……

司の会心を喜ぶべきなのに、何故だか素直に喜べなかった。それどころか、得体の知れない不安を感じて心細くなってしまっ

司がこんなに近くに居るのに。

こんなに傍に来てくれるのに……

どのくらい経ったのかしら？

被っていた布団を軽く引っ張られて、そのまま寝込んでしまった私は、ぼんやりと眼を覚ました。

「あ？ ……もうそんな時間なの？」

「うん」

私は外出の支度をして、妙にソワソワとして落ち着かない司の姿を眼で追った。

「先に連れて行くって言ってるのに、意地っ張りだなあー。素直に医者に診て貰えば？ 俺だったらそうするよ」

サイドテーブルに置いた氷水入りの洗面器から、タオルを硬く絞ると、司は私のおでこにそっと乗せた。

冷たくって気持ち良い。

「赤い顔して……熱、あるんでしょ？」

司はそう言って私の顔を覗き込み、ぐぐつと顔を近づけて来る。

「よ、余計な……」

「いいから」

「いくないっ……んふ？」

近づいて来た司の顔は、すこしも止まってくれなくて、私はそのまま唇を奪われた。

驚いて、咄嗟にもがこうとしたけれど、司は私の行動を見切り、素早く両手首を掴んでベッドに押さえ付ける。

第8話

> i 1 3 2 1 8 — 3 1 6 <

「ん……」

無理矢理な行動の割には、キスは少しも濃厚じゃない。まるで私の体調を調べているみたいなの……そんな労わりすら感じてしまう。私は司に抵抗するのを止めて、そつと眼を閉じた。

「……………」

重ね合わせるだけのキスなのに、何故だか心がじわりと温かくなつて来るような……そんな気がする。

「まだ熱は出ていないみたいだけど、ホントに大丈夫？ 俺、行ってもいい？」

「うん……」

司の問い掛けに、私はこくりと顎を引いた。

この数カ月、毎日のように出掛けて行つては夜遅くに戻つて来る。一体、何処で何をしているのか……司に訊ねてもはぐらかされてばかりで、ちつとも真面目に答えてはくれない。でも、学生時代に走り屋だった司が、昔を思い出して私のフィットを乗り回し、峠を攻めているとも思えなかった。フィットのガソリンだってそんなに極端には減つてはいないから、走り回つていると言うワケでも無さそうだわ。

これが半年前なら、私は司の女遊びだと信じて疑わなかったと思う。でも、今は遅くなっても必ずここに帰って来るし、化粧や香水の移り香さえ漂わせてはいない。

それが逆になんだかも凄く不思議だった。

* * *

あれから半年後……会社は予定通り、司達QCチームにグアム旅行と褒章金を与えた。

空港のロビーで、私は部署の見送り組に紛れて、出発する司の姿を捜し求めたけれど、夏休みとお盆の休日も合俟って、普段は閑散としている筈の田舎の空港は人が多くて……

お陰で私達見送り組は、何とか司のチームを無事に送り出せたのだけれど、肝心のリーダーである司本人の姿を見付け出す事が出来ないまま……とうとうアナウンスが、司達の乗った飛行機が離陸待機状態になった事を告げてしまった。

じりじりと照り付ける真夏の太陽を逆光にして、司達の乗った飛行機は、轟音を響かせて貫けるように澄み切った紺碧の青空に向けて飛び立ってしまう。

ほんの少しだけ…… たった二泊三日なのに、司がそのままずっと離れて行ってしまふような…… そんな不安が過ってしまう。同行しているのは司一人に社員と派遣の女の子達五人と言う、傍目男性から見れば、垂涎もののハーレム状態。司が『オイシイ』状況なのは誰が見ても明らかだけど、私はただ黙って見送るより他に手は無かった。

私が司に気付かなくても、司なら私の事を気付いてくれるかな？
なんて思っていたのに…… 期待してソンしちゃった…… かな？

ああ…… せつかく見送りに来たのに……

今日から私も一週間の夏休み。カレシいない歴が今年でSTOP出来るかなー？ なんて期待していたのに…… やっぱり毎年も独りになっちゃうんだわ。帰省して来る友達の何人かは、自分達の家族が出来てそれぞれ忙しそうだし、逢えたってお茶するくらいしか出来ないのよね。

部署の皆とロビーで別れた私は、自分のフィットを停めている駐車場まで、落ち込んだ気持ちと重くなつた足取りを引き摺った。

司と逢えない少しの間、独りで留守番だなんて……

詰まんないな……

第9話

> i 1 3 2 1 9 — 3 1 6 <

ぼんやりとしながら運転席側のドアに手を掛けると、隣に停めていた走り屋仕様の白い車の運転席から、私は聞き覚えのある声とよく似た、軽そうな声に呼び止められた。

「もう帰んの？　ねえ、これから海を渡ってお泊りで遊びに行かね？」

『お泊り』……って、真っ昼間からなにを言っているのよ？　私は夏休みの初っ端から、司に振られちゃったのよ？

全くもってツイて無いわ。なによ、こんな時に限ってヘンなヤツに絡まれて……もう……放っておいて欲しいわっ！

もの凄おーく軽いナンパ口調に煽られて、私はいつも以上にムカついた。

「っさいわね？　私は忙しいのよっ！　ナンパなら他をあたって！」

もう、私に構わないでっ！

「怖えーな？　なんかあったの？」

「なに言ってるのよ？　アンタが私に『行って来ます』の一言も無しにさっさと行っちゃったからじゃないのよっ！……え？」

あれ？ 勢いに任せて口走ってしまったけれど……私、今誰と話しているのかしら？

「へえー、俺がいつ『行く』って言ったの？」

「……え？」

機嫌を損ねてしまった私を面白がり、からかって来る『声』の持ち主に、私はまさかの奇妙な予感を抱いてしまい、恐るおそる隣の車へと視線を移した。

……どうして？

手にしていたコーチの淡いピンク色のレザーバッグを思わず路上に落としてしまい、眼の前で起こった出来事に驚いて、私は両手で口元を覆った。

聞き覚えのあるアマノジャクな喋り方と、ここにいる筈の無い司の姿がどうしても信じられなくて……私は暫らく呆然とその場に立ち尽くしてしまった。

しかも、司が入社当時に事故で廃車にしていたはずの、白いインテグラに乗っている。

夢……なの？

「なに驚いてんの？」

司は私の驚いた表情を見るなり、『シテヤツタリ』とばかりに得意になってフフンと鼻で笑った。

「だっ、だって、あ、あの……旅行……飛行機がさっき……」

最終話

> i 1 3 2 2 0 | 3 1 6 <

「あー、トイレに行つてて乗り遅れちゃったみたいだな?」

「み、みたいだなんて……あ、あ、アンタねえ……」

他人事のように言った司の言葉に、私は嬉しいやら、事後処理の事が頭に浮かんで気が重くなるやら……

「コイツ、やっと修理出来たんだ」

私の複雑な心境を無視して、司は嬉しそうに自分の車に顎を杓つた。連日遅くまで外出していたのは、どうやら車の修理の為だったみたいだわ。

「旅行、どうするのよ?」

「ああ、なんかさ、急な用事でキャンセル待ちしていた人が居たから」

「その人に、司の席を譲つたつて言うの?」

「うん」

シレッとして全く悪びれない司の笑顔に負けそう……この日の為にパスポート用意していたのに。海外旅行だなんて、こんなキャンセルは滅多に無いと言うのに、司は『惜しい』とは思わないのかしら?

司の行動に面喰ってしまい、頭の中がぐちゃぐちゃだわ。眩暈がしつこい……

「ほらあ、サツサと乗って？」

「きゃっ?」

司は運転席のドアを開けるなり右手で私の右手首を掴むと、少し強めに引き寄せる。同時にウエストに左腕を伸ばして来た。私は咄嗟に反応が出来ず、勢い余ってくるんと身体の向きを反転させると司の膝の上にすとんと座り込んでしまった。

「いやー、課長つては積極的だなあ。助手席は空いてますよ? それとも今すぐ即えっち?」

「んなつ、何言つてんのよおおお~~~~!!!!」

自分から遣っておいて、なに言ってるのよ?

スケベ丸出しの司の言葉に、真っ赤になって反論しようとしたその時だ。

私のバッグから、携帯がかわいらしい音を立てた。出ると、機上の人になっている事務員の彩加さんからだ。

「課長うとうつて、日高さんが乗ってないんですー。代わりにヘんなオジサンが乗ってるーどうしましょう?」

「……あ?」

背後から司の利き手が、私の左の脇を通ってするりと伸びて来た。喉元をなぞって軽く顎を掴まれる。驚いて、感じた私の肩がビクリと大きく跳ね上がった。

首を傾げるようにして振り向くと、司は悪戯っぽく笑って目配せした。そして、右の人差し指を立て、そっと私の唇に押し当てて『黙って』の合図を遣す。

「課長うゝ、聴いてますうゝゝゝ??? 課長おおゝ?」

私を覗き込むようにして、司の顔が近付いて来る

半ベソを掻いている彼女の声を聴きながら、私の息が止まった…

…××××

最終話（後書き）

ご一読、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5192o/>

そのオトコ要注意っ（社内コンテスト編）

2011年2月18日17時26分発行